
目次

2019年国際混合研究法学会アジア地域会議/
第5回日本混合研究法学会年次大会
参加報告
Pages 2-9

2019年国際混合研究法学会アジア地域会議/
第5回日本混合研究法学会年次大会
アンケート結果報告
Pages 10-12

第1回混合研究法(MMR)コロキウム&
第3回日本混合研究法学会セミナーシリーズ
参加報告
Pages 13-14

第2回混合研究法(MMR)コロキウム
参加報告
Page 15

質的研究ワークショップ
参加報告
Pages 16-20

JSMMRからのご案内
Page 21

MMIRAアジア地域会議 日本混合研究法学会第5回年次大会 2019年9月14-16日 in 浜松

大会参加報告

私はPublic Healthの分野で特に地域をベースにした活動と研究をしており、昨年从这个学会に参加させていただくようになりました。今回のJSMMR年次大会もMMIRAのアジア地域会議ということでしたが、昨年以上に世界のトップレベルの研究者の皆さまが多く参加されている印象を受けました。北米、東アジア、東南アジア、アフリカ、欧州など、世界各国から参加者がお越しになっていて、発表演題もバラエティに富んでおり、密度の濃い大会でした。



特別講演、基調講演の素晴らしさは言うに及ばず、ひとつひとつのセッションも充実していました。例えば、初日の夕方に開催されたラウンドテーブル(計11題)は、1つの研究ごとに10名程度の小さなグループになり参加者が議論するというものでした。皆さん活発にコメントされていて、発表者にも多くのTakeがあったのではないかと思います。

様々な学会と比較して、この学会の特長のひとつは、参加者同士の距離感が近くインタラクションが多いこと

ではないかと思います。特に、世界トップの先生方と至近距離で気軽にお話ができたり、研究へのフィードバックをいただける学会は、他にあまり例がないのではないのでしょうか？懇親会でビールを酌み交わしながら、レジェンドのCreswell先生とお話できて、私もテンションが上がりました。

2日目の午後の基調講演でCristin Davis先生が、「私はこの世界をより良いものにしていくために研究をしている」とおっしゃっていました。現実社会の問題解決のために研究を行う者たちが、その方法について議論を深めるのが、本学会の目的だと思います。この精神は「学問に凝ることなかれ」、つまり学問のための学問をするのではなく、何のために学問をするのか考えよ、という福澤諭吉の言葉にも通じると思いました。

本大会で出会った国内外の研究者とコラボレーションしながら、より良い研究をミクストメソッドで実施していきたいと思っています。

最後に、会場となった静岡文化芸術大学は、浜松駅から徒歩圏内で便利なだけでなく、建築的なデザイン性も高い素敵な場所でした。素晴らしい大会の企画と運営に奔走されていた実行委員長の河村洋子先生、本当にお疲れ様でした！！



報告者：

秋山美紀

慶應義塾大学環境情報学部教授

MMIRAアジア地域会議

日本混合研究法学会第5回年次大会 ワークショップ参加報告



「グラウンデッドなテキスト・マイニング・アプローチ(GTxA)」

講師：稲葉光行

立命館大学政策科学部教授
日本混合研究法学会理事長

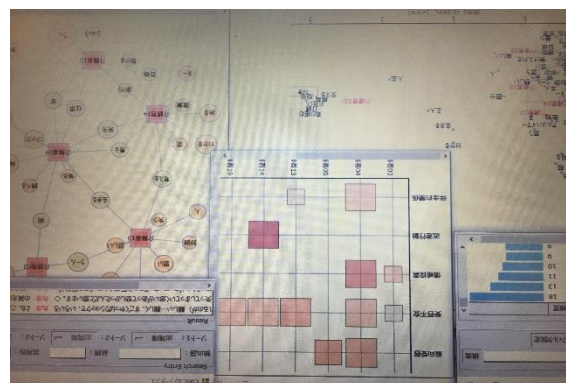
質的データを分析しているとき、誰しもデータとじっくり向き合わなければと思う一方、その分析プロセスを少しでも効率的にできればと思ったことは一度ならずあるだろう。稲葉先生のGrounded Text Mining Approach (GTxA)に関するワークショップは、このようなジレンマを解消するのに貴重なヒントを与えてくれた。以下、その報告を示せればと思う。

当日は15名ほどの参加者がいて、全体の流れとしては最初にGTxAの概要説明、その後ソフト(KH Coder)を用いての実習形式、そして最後に質疑応答という3部構成だった。序盤の概要では、GTxAの構成要素である構成主義版グラウンデッド・セオリー(C-GTA)の説明に始まり、C-GTAのプロセスにテキストマイニングを組み込んだ質的研究主導型の混合研究法であること、また質的データを量的にも処理・分析するクロスオーバー混合型分析であるといった諸特徴が述べられた。C-GTAとテキストマイニング、一連のプロセスで柔軟に両者の分析結果を統合することで、GTxAは「研究者による独創的な解釈とコンピュータによる客観的な検証の両立」を目的としている。

次の実習では、インタビューデータを用いてGTxAの分析手順を体験していった。まずはテキストマイニングツールの1つであるKH Coderで共起ネットワークや対応分析などの視覚化を行うことによってテキストデータを多面的に概観でき、次のステップであるC-GTAのストーリー化の際に「感じ」が活きたとのことであった。そしてC-GTAで生成したコードをソフトにコーディングルールとして定義することにより、今度はコードや属性間

の関係を数量的に捉えることが可能となる。C-GTAとテキストマイニングから得られた個々の分析結果を照合することで解釈にも厚み生まれ、最終的に統合結果としてのストーリーラインを作成するのがGTxA全体のプロセスである。

質疑応答ではテキストマイニングを実施するのに適切なデータの事前処理やボリューム、分析結果のビジュアルが示す意味といったKH Coderの機能に関するものが多くあったが、テーマ分析とテキストマイニングを組み合わせられるかという質問は印象的だった。確かに、GTxAという字面からGTAを想起してしまいがちだが、GroundedのGならばテーマ分析のような探索的な分析とも相性は悪くないはずである。稲葉先生は意味ある分析であれば問題ないとのことであった。GTxAの学習機会の担保が課題として挙げられていたが、方法論として柔軟性や有用性を備えているので本報告がGTxA普及の一助になれば幸いである。



KH Coderによる視覚化

報告者：

守屋亮
早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程
日本学術振興会特別研究員DC

MMIRAアジア地域会議

日本混合研究法学会第5回年次大会 ワークショップ参加報告

「人間科学における混合研究法の基礎と実践」



講師：抱井 尚子
青山学院大学国際政治学部
国際コミュニケーション学科教授
日本混合研究法学会理事



講師：八田太一
京都大学IPS細胞研究所特定助教
日本混合研究法学会理事

本ワークショップは、第1部「混合研究法の基礎」、第2部「観察研究における仮説演繹法の活用」の2部構成で、2名の先生の講演の後に、ディスカッションの時間を設けたことにより、より一層混合研究法の理解を深めることができたと感じる。以下、講演とディスカッションの概要について、報告する。

第1部の抱井先生による「混合研究法の基礎」では、混合研究法統合のトリロジー：①哲学②方法論③方法の三部作のうち、①哲学的柱としてのパラダイム論争について、「質的研究」を＜構築主義・社会構成主義＞としてみかんに、「量的研究」を＜ポスト実証主義＞としてりんごに例えて、二つの両立不可能性について話された。しかし、研究者のパラダイムを明確にしたうえで、評価基準を変えることで、みかん＋りんご＝梨という「第3の考え方」として、混合研究法の9つの妥当性が明確となったということ。そして、②方法論的柱における、質的と量的の統合によって生まれるメタ推論重要性について、さらに③方法的柱として、混合研究法の3つのポイントとして、研究目的・設問、デザイン、統合を掲げられ、その中でも質的と量的の両方を取り入れた応用型デザインについての説明があり、介入研究デザインの例から、具体的にイメージすることができた。質的・量的アプローチを組み合わせるこ

とで、より研究課題に関する良い理解が得られることが理解できた。

第2部の八田先生による「観察研究における仮説演繹法の活用」では、八田先生の研究「がん医療現場における対話の分析：収斂デザインとクロスオーバー分析を用いた混合型研究」を例に、収斂デザインとクロスオーバー分析の流れが分かった。さらに、医療に関する達成動機尺度の開発においての、データ収集の方法と結果における連結やジョイントディスプレイの実際を知ることができた。

最後のディスカッションにおいて、八田先生は、2008年のプロトコル作成から、論文Publishまで10年かかったことを語られ、さらに研究方法に関する、具体的な質疑応答が交わされた。質と量の両方のデータを持っていることで、あらかじめシステムティックに組めることが、混合研究法の良いところであることも実感できた。最後に、抱井先生より、混合研究法の初心者には、説明的順次デザインから入るのが良いこと、どこに着目するかは、量的データをアンカーにすれば分かるということと話され、私自身の今後の研究に活かしていきたいと思った。3時間にわたるワークショップに参加して、多くの学びを得ることができ、ありがとうございました。

報告者：

佐藤美佳
日本赤十字秋田看護大学看護学部看護学科講師

MMIRAアジア地域会議

日本混合研究法学会第5回年次大会 ワークショップ参加報告



「社会課題解決の混合型研究の展開： ポジティブ・ディビアンズ」

講師：河村洋子

静岡文化大学文化政策学部准教授
日本混合研究法学会理事長

本学会は参加する度に新たな出会いがあり、臨床と研究を両立しながら少しでも社会に貢献できたらの思いがエンパワメントされる。今回の内容もどれも興味深いものだったが、河村先生の第3回混合研究法学会(2017)でのワークショップ(実践的混合研究法:REAIMのフレームワークを活用した多面的なプログラム評価)に参加して、混合研究法の有用性を実感できたため、初めて目にした“ポジティブ・ディビアンズ(以下PD)”というキーワードや社会課題解決という言葉に惹かれ、今回も河村先生のプログラムに参加した。

まず、河村先生が自己紹介を交えながら、PDとの出会いを語られた。その際、「聞こえない声を聴く」との言葉を耳にし、早速参加してよかったと実感しながらワークショップが始まった。“見逃したら惜しい逸脱をいかに見つけるか”、“解決策はコミュニティが一番よく知っているはず”、“当たり前以外のものを受け入れる柔軟性”、混合研究法に関心を持たれる研究者の心に響くであろう言葉が用いられながら、「ヴェトナムでの低栄養改善の取り組み」や「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌の院内感染予防対策」等の具体的な実践例を交え、PDについて説明して下さった。こういった話を聞くと、つついどういったことにでも活用したくなるもの

だが、PDを活用する価値があるかの条件があり、戦略的に活用するためにも、データを丁寧に参考にする必要がある。ここに混合研究がその役割を發揮する可能性をイメージしながら、PDの手順(特定→決定→発見→デザイン→モニタリング)について学んだ。おそらく参加者は自身の研究を想定しながら理解を深められたのではないだろうか。

それから、参加者が円座になり自己紹介、自身の研究、ワークショップを共にして得たいことなどについて語り合い共有した上で、グループになり、PD活用の練習として、特定と決定のプロセスの思考ワークを行った。他の参加者の視点を通して河村先生の解説を聞くことで、また新たな捉え方を知ることができた。

河村先生から感じるバイタリティや参加者のサポート的な雰囲気な中、レクチャーとグループワークを通して、自身の研究と照らし合わせながら理解や検討を深められる有意義な時間であった。また、学会後も共同研究者とも共有し、今回もエンパワメントされる機会となった。

報告者：

長浦由紀
長崎大学病院総合診療科臨床心理士
長崎大学大学院医歯薬総合研究科総合診療学分野客員研究員

MMIRAアジア地域会議

日本混合研究法学会第5回年次大会 ワークショップ参加報告



「Using Joint Displays for Designing, Analyzing and Presenting Mixed Methods」

講師: マイク D. フェッターズ
Michael D. Fetters

ミシガン大学家庭医療学科教授

私は、混合研究法を用いて博士論文を執筆したのですが、博士課程を修了後も引き続き、“計画段階で、どのように研究計画を立てていたら、良かったのだろうか?”、“どのようにIntegrateしたら良かったのだろうか?”、“サンプリングの方法は果たして、これで良かったのか?”など、数々の疑問が残っていました。そんな中、混合研究法について調べる中で、インターネットで今回の学会およびワークショップの開催情報を見つけました。そして、これは疑問を解消し、今後の研究に活かすためにも、混合研究法を学ぶ絶好の機会だと思い、1週間前という直前ではありましたが、すぐに学会に参加することを決めました。

私はFetters先生によるワークショップに参加しました。ワークショップでは、予めFetters先生が用意して下さった5つのフォーマットに沿って各自の研究プロジェクトと照らし合わせていきました。(1. 質的、量的及び混合研究法を用いる根拠を確認する。2. どのようなデータソースを収集するのか。3. 混合研究法デザインを選択する。4. ジョイントディスプレイを作成する。5. 結果の解釈及び報告に利用できるジョイントディスプレイを作成する。)

私は、現在、計画段階にある研究プロジェクトについて、ワークを進めていったのですが、サンプリングの方法など、所々で計画の見直しの必要性があることに気づかされました。他の受講生も私と同様に、ワークの中で研究計画を再考する機会となったようで、ワークショップでは受講生から数多くの質問が挙がり、

Fetters先生がそれに応えるという形で、非常に活発な雰囲気でした。他の受講生からの質問により、私自身も更に学びを深めることが出来たと思っています。そんな中、1人の博士後期課程の学生さんが、自身の研究結果のIntegrateの方法について質問をしていたのですが、それは私が博士後期課程で、博士論文に取り組んでいた時に持っていた疑問と全く同じで、まさに私が今回、質問したい内容でした。

実は、今回の学会の中で、日本人として初めてJournal of Mixed Methods Researchに論文が掲載された執筆者であり、本学会の実行委員でもある京都大学の八田太一先生、成田慶一先生とお話をさせて頂いたのですが、その中で私が感じている疑問は、私だけではなく他の方もよく抱える疑問なのだという事を知り、少し安心したのを覚えています。これまで、私は書籍や混合研究法を用いた文献を参考に研究プロジェクトを進めてきたのですが、研究プロジェクトは各人で違いますし、他の研究者のやり方がそのまま、私の研究に当てはまることは滅多にありません。

そんな中、Fetters先生から直接、研究計画から結果の示し方まで、細かな指導を受け、質問する機会が得られたことに心から感謝しています。やはり、書籍や文献から学習することと、実際にその場に参加して得られる学びは違いますので、是非、ご自身の研究の取り組みの中で疑問がある方は、この機会を活用されることを強くお勧めします。

報告者:

大城真理子
沖縄県立看護大学助教

MMIRAアジア地域会議 日本混合研究法学会第5回年次大会



「Designing Mixed Methods Research Under Complex Conditions」

講師：シェリル ポッシュ
Cheryl Poth

アルバータ大学教育学部教授

The town of Hamamatsu, placed in the Western Japan in Shizuoka Prefecture, hosted the international scientific conference on the mixed methods research (MMR) (September 14-16) organized by the Japan Society for Mixed Methods Research (JSMMR) and the Mixed Methods International Research Association (MMIRA). Hamamatsu is a city of music, where Yamaha Company find it's home. Worldwide very known and valued factory of musical instruments with numerous international musical contents gives the city its special musical atmosphere and character of happiness. Similarly, as the city itself the friendship, happiness, collaboration, engagement and respecting the differences was prevailing atmosphere of this year conference. The 2019 MMIRA/JSMMR conference was celebrating the differences and making bridges between quantitative and qualitative world, between different nationalities, countries and continents, different perspectives, studies, backgrounds, and expertise in MMR.

From the perspective of an international conference participant I could say that observing, experiencing and engaging in MMR community was truly thrilling and highly educative. The whole conference program, including special plenary lecture, plenary lectures, open forums, seminar for the public, oral presentations, workshops and round

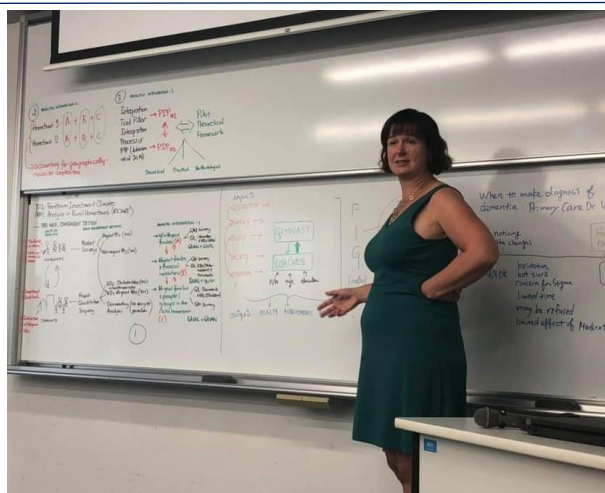
tables was dynamic and high quality in terms of content and way of teaching. I enjoyed and appreciated every single lecture, discussion and workshop activity. However, in this report I would like particularly emphasized my view on the Post-conference Workshop, conducted by Professor Cheryl Poth, PhD from the University of Alberta in Canada. Professor Poth was one of the invited plenary speakers at the conference. On the second day (September, 15) she presented very interesting plenary lecture with the title “*Embracing Complexity through Integrative Thinking in MMR*”, where she highlighted a current concept of complexity, designing a complexity-sensitive MMR, and how integrative thinking with complexity can avoid some practice dilemmas. The plenary gave a foundation for the Post-Conference workshop No. 2 on September 16th 2019, where practical approaches of “Designing a MMR under complex conditions” with the six guiding adaptive practices were introduced and implemented by participants on their MMR projects.

(continue to the next page)

報告者：

Joca Zurc,
JSPS International Research Fellow,
Okayama University, Graduate School of Education, Associate Professor

MMIRAアジア地域会議 日本混合研究法学会第5回年次大会



「Designing Mixed Methods Research Under Complex Conditions」

講師：シェリル ポツシュ
Cheryl Poth

アルバータ大学教育学部教授

(Continued from the previous page)

In three-hour workshop the three key questions were considered: 1) What distinguishes MM researchers under conditions of complexity?; 2) How can researchers avoid common dilemmas when designing MM studies under complex conditions?; 3) What recent understandings of adaptive practices can be incorporated into a complexity-sensitive approach to designing MMR? After introduction and getting to know one another based on research and publications activities in MMR the workshop discussion in friendly atmosphere lead participants from Japan, Philippines, Caribbean and Slovenia through exploring the MMR complexity connections in different ways. Every key message was accompanied with a practical activity and connected theory learning with our own MMR. In my opinion, the most beneficial was a task to design a visual presentation of our own MMR project. Participants' presentations and

Professor's comments on design visuals, procedural visuals and joint displays gave us a unique and valuable feedback, contributed to both, our MMR and deeper understanding of MMR complexity.

The 2019 MMIRA/JSMMR conference enable me a thrilling and memorable experience with valuable feedback and stimulating motivation for my continued engagement in MMR.



報告者：

Joca Zurc,
JSPS International Research Fellow,
Okayama University, Graduate School of Education, Associate Professor

MMIRAアジア地域会議 日本混合研究法学会第5回年次大会



「Fully Integrated Mixed Methods Research」

講師: エリザベス G. クリーマー
Elizabeth G. Creamer

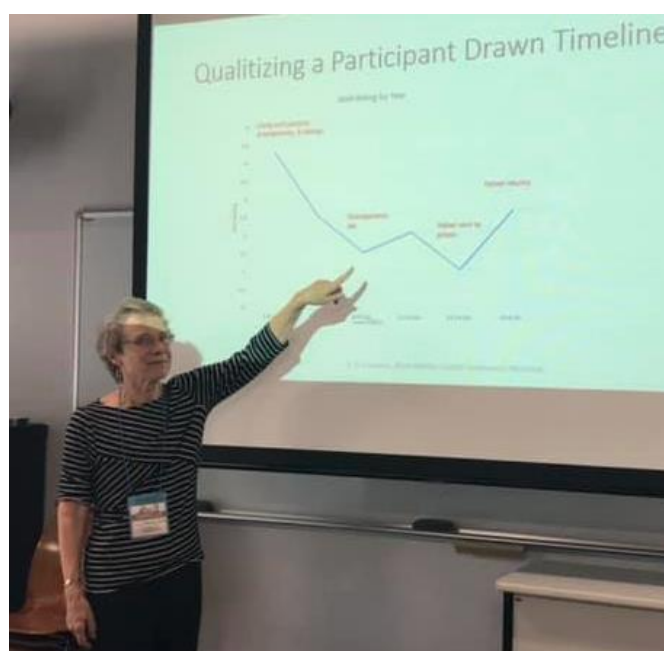
バージニア工科大学教育学部名誉教授

量的研究者の私が、初めて参加する混合研究法の国際学会でワークショップにまで参加してもいいものだろうか、と申し込む前は若干の躊躇があったが、意を決して参加した。結果は受講して大正解であった。学会後のワークショップとあって参加者は4名と少数だったが、Dr. Creamerが参加者の研究トピックに対する疑問に答える形でワークショップは進められ、ほぼ個別指導で指導を受けることができた。今から振り返るとMMIRA会長であるDr. Creamerのワークショップを4人で受講できたのは本当に幸運だったと思う。また、ワークショップには京都大学の成田先生が逐次通訳として参加され、単に日本語に訳すだけでなく混合研究法の背景知識を適宜補足説明していただいた。まさに至れり尽くせりのワークショップで本当に貴重な学びができたと思う。

私が今回のワークショップに参加した一番の目的は、multi-methods と mixed methodの違いを明確にすることだった。事前いくつかの論文や本を読んでも漠然としたイメージしかつかめなかったが、ワークショップでのDr. Creamerの簡潔かつ明確な説明によりはっきりした違いを理解できた。また、ワークショップ内では多くの参考文献が多数紹介され、これらは今後の研究を進めていく上で有益な手助けとなるだろう。

長い国際学会後のワークショップでもありDr. Creamerはお疲れもあっただろうが、リサーチの話

が進むにつれて人を引き込むような熱い語りをされ、自分のドクター時代の指導教官の姿と重なって見えた。混合研究法の素晴らしさを少しでも参加者に伝えようとされたDr. Creamerの研究者としての情熱を間近に感じることができ、極めて幸福な3時間を過ごせたことに心より感謝したい。



報告者:

吉田弘子
大阪経済大学経済学部教授

MMIRAアジア地域会議

日本混合研究法学会第5回年次大会 アンケート結果概要報告

MMIRA Asia Regional Conference 2019/ 2019年日本混合研究法学会(以下、本大会)参加者および日本混合研究法学会会員(以下、JSMMR会員)を対象にアンケートを実施しました。まずもって、本大会アンケートにご協力いただいたみなさまにお礼申し上げます。今大会では、新たな試みが海外の参加者から評価された一方で、大会運営に関して国内の参加者から厳しいご指摘もあり、本学会理事会としてアンケート結果の概要を公開することに致しました。

このアンケートはEメールと学会メーリングリストにて回答を依頼し(回答期間:2019年9月14日～10月3日)、合計77件の回答を得ました(大会参加者有効回答57件、大会不参加者有効回答14件、無効回答16件)。以下、大会参加者と大会不参加者に分けて結果概要を報告します。

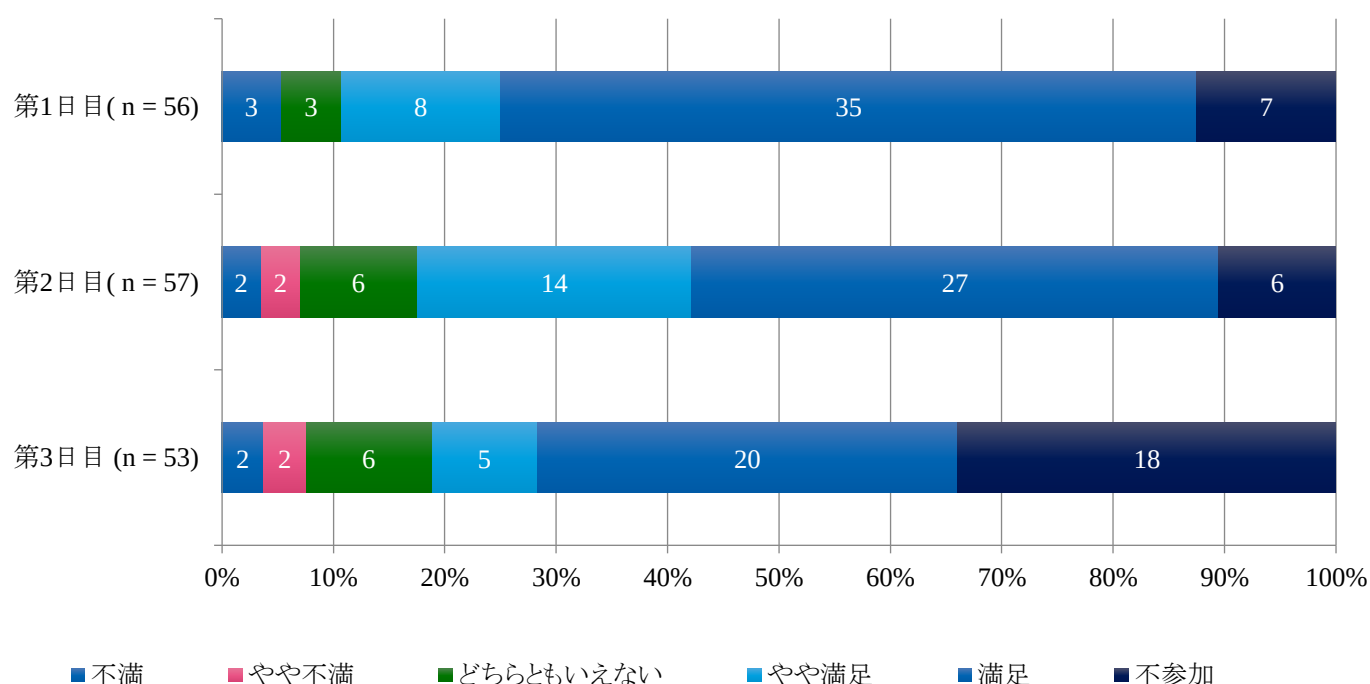
<大会参加者の回答結果の概要>

回答者の会員属性はJSMMR会員38件、MMIRA会員8件、MMIRA/JSMMR会員8件、非会員3件でした。

回答者の主な専門分野は看護学24件、教育学14件、言語教育5件、医療4件、その他10件でした。

回答者が本大会に参加した理由(複数選択可)は、「今後自身の研究の参考にするため」50件、「周りに参加を勧められたため」8件、「学位論文執筆のため」7件、「研究助成金獲得のため」7件でした。大会3日間の満足度は、「不満」、「やや不満」、「どちらとも言えない」、「やや満足」、「満足」、「不参加」の選択肢のうち「やや満足」または「満足」と回答した割合は、第1日目76.3%、第2日目71.9%、第3日目47.1%でした(図1)。さらに、今後の学会企画への関心として、「混合研究法の日本語講演」、「研究を洗練させるコロキウム」、「海外研究者による専門的ワークショップ」、「混合研究法の発展的レベルの日本語講義」に対し、5段階評定を尋ねたところ、評定平均はそれぞれ3.46、3.92、3.96、3.64でした(図2)。

(次頁につづく)



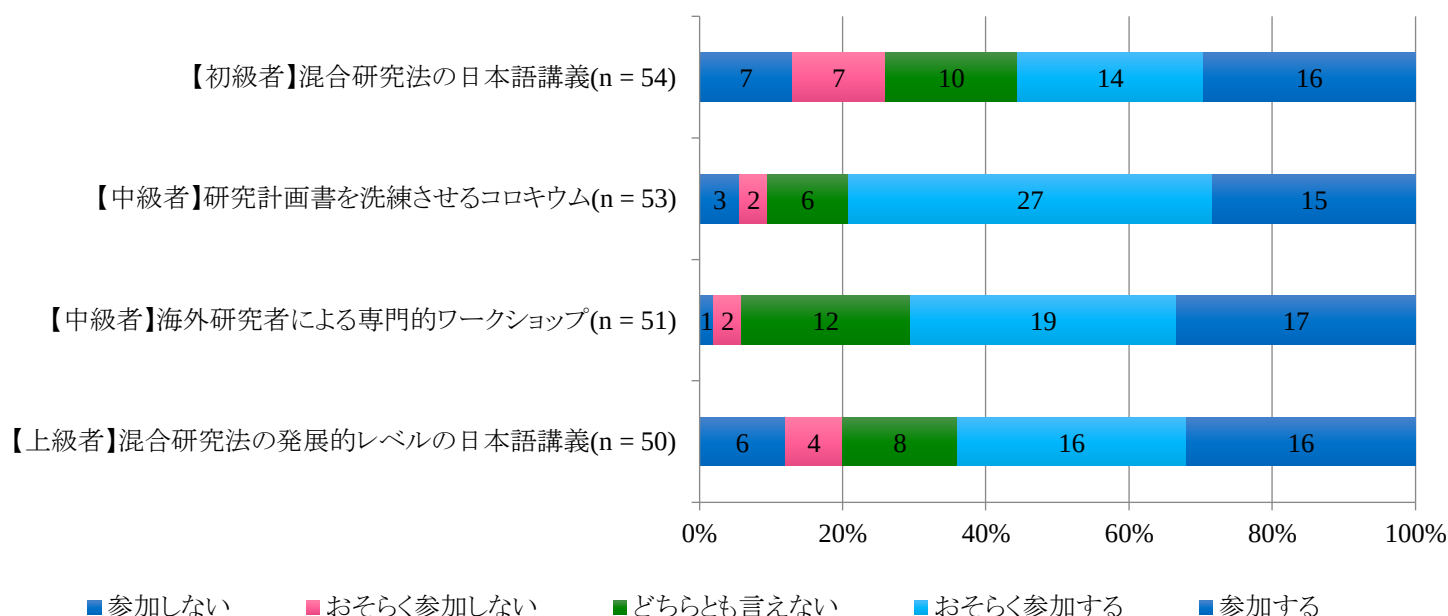
(図1 参加者の大会に対する満足度)

報告者:

八田太一
日本混合研究法学会理事
京都大学 iPS 細胞研究所上廣倫理研究部門

MMIRAアジア地域会議

日本混合研究法学会第5回年次大会 アンケート結果概要報告



(図2 参加者の今後の学会企画に対する期待)

(前頁からつづく)

<大会不参加者の回答結果の概要>

本大会に参加しなかったJSMMR会員より14件の回答が寄せられました。本大会に参加しなかった理由(複数選択可)としては、「時間・日程が合わなかった」12件、「発表する演題がなかった」2件、「時期が他の学会と重複していた」1件でした。

さらに、今後の学会企画への関心として、「混合研究法の日本語講演」、「研究を洗練させるコロキウム」、「海外研究者による専門的ワークショップ」、「混合研究法の発展的レベルの日本語講義」を5段階評定で尋ねたところ、評定平均はそれぞれ3.85、4.23、4.00、3.42でした(図3)。

<アンケート結果をふまえて>

本大会に対する参加回答者の満足度に注目すると、第1日目と第2日目の内容に対し約7割の回答者が満足し不参加も約1割でありましたが、第3日目に満足を示した回答者は半数に及ばず不参加も約3割でした。第3日目について、自由記載の中に「通訳の不在」や

「参加者の減少」を指摘するものもあれば、一方、とりわけ海外の参加者よりAsia Open Forumを評価する声やJSMMRへの期待も寄せられていました。

また、今後の学会企画として、参加された方も参加されなかった方も「研究を洗練させるコロキウム」、「海外研究者による専門的ワークショップ」に参加の意欲を示していました。自由記載の中には、具体的なテーマでのワークショップや個別のコンサルティングといった、より実践的な企画を望む声も。

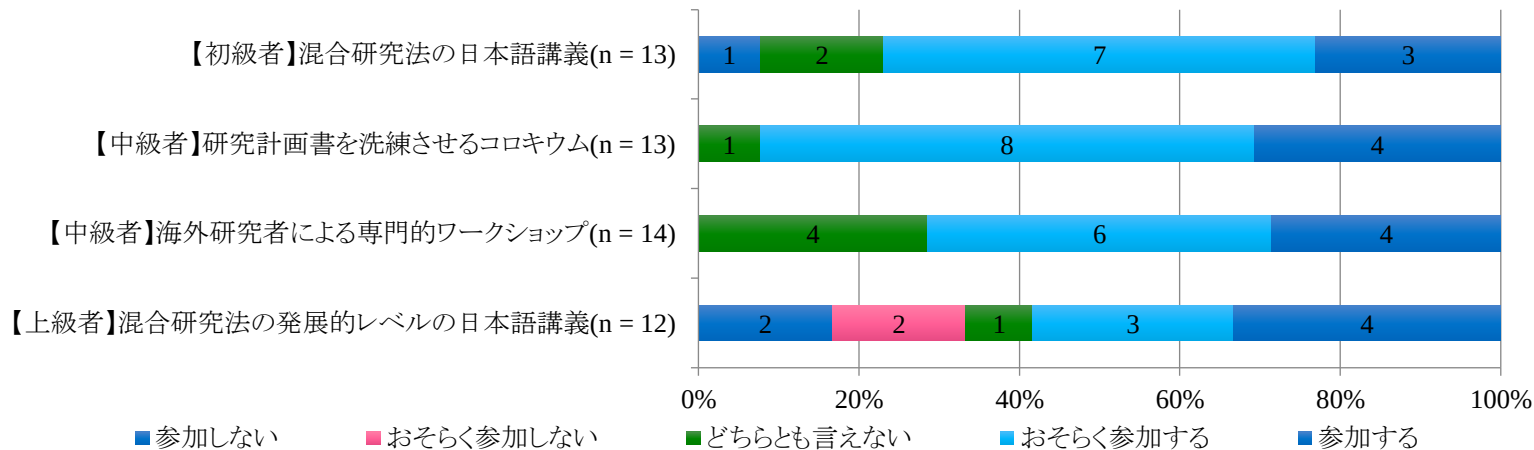
最後に、大会全体の運営に関連して、一般演題の取下げや発表者の当日不参加によるプログラムの空白を指摘する声、あるいは、それらが本大会への不満や運営体制への懸念を示す声も寄せられました。本学会理事会は、これらの指摘を真摯に受け止め、今後の大会準備ならびに運営の課題として次回大会実行委員会に引き継ぎ、より良い学会のあり方を模索し続ける所存です。願わくは、皆さまからのより積極的な参画を切に期待する次第でございます。今後とも、学会員の皆さまからのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

報告者:

八田太一
日本混合研究法学会理事
京都大学 iPS 細胞研究所上廣倫理研究部門

MMIRAアジア地域会議

日本混合研究法学会第5回年次大会 アンケート結果概要報告



(図3 不参加者の今後の学会企画に対する期待)



報告者:

八田太一
日本混合研究法学会理事
京都大学 iPS 細胞研究所上廣倫理研究部門

第1回混合研究法(MMR)コロキウム

日本混合研究法学会セミナーシリーズ第3回

立命館大学大阪いばらきキャンパス 2018年6月10日

〈第1部〉

講演

講演1:「混合研究法への期待」

齋藤 清二 (立命館大学総合心理学部/大学院人間科学研究科)

講演2:「混合研究法概説」

八田 太一 (京都大学 iPS 細胞研究所上廣倫理研究部門)

講演3:「質的研究主導型混合研究法の可能性」

廣瀬 真理子 (関西学院大学大学院文学研究科)

〈第2部〉

オープン・ディスカッション

ファシリテータ: 稲葉 光行 (立命館大学政策科学部)

安田 裕子 (立命館大学総合心理学部)

混合研究法(MMR)コロキウムは、大学院生などの初学者から第一線で活躍する研究者・実践家が集い、混合研究法の学びから研究実践に至るまでの多様な課題について自由に語り合う場として、学会有志によって提案された企画である。その第1回の集会が、2018年6月10日(日)に、立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催された。参加者登録者は約50名であった。

コロキウムの第1部では、学会のセミナーシリーズも兼ねて、3つの講演が行われた。

最初の講演は、齋藤清二氏(立命館大学総合心理学部/大学院人間科学研究科)による講演1「混合研究法への期待」である。齋藤先生は内科医を経て、現在心理学の大学院生を指導する立場にある。講演の最初に、自身が医学研究を始めた頃に、「量的データを集めて分析することを重視する一方、一人ひとりの患者を重視しない」アプローチに疑問を持ったという話題が紹介され、その後、患者一人ひとりの心的世界を掘り下げるための「ナラティブ・ベースド・メディスン」への興味のシフトがあったことが紹介され

た。そのような経緯を経て、患者自身や病いを理解するために役立つ方法を柔軟に組み合わせて使っていくという、プラグマディズム的な発想を持った混合研究法への大きな期待が述べられた。

(次頁につづく)



齋藤 清二氏の講演の様子

報告者:

稲葉光行
立命館大学政策科学部教授
日本混合研究法学会理事長

(前頁からつづく)

講演2「混合研究法概説」では、八田太一氏(京都大学iPS細胞研究所上廣倫理研究部門)から、混合研究法に関する導入的な話題の提供をいただいた。前半ではTasakori & Cresswell、Burk Johnson & OWuenbuseなどの混合研究法の定義が紹介され、混合研究法の実践においてどの哲学的スタンスから課題にアプローチするのか、またその枠組みとして誰の混合研究法の定義を用いるのかを明示することの重要性の指摘がなされた。次に、混合研究法のデザイン(収斂デザイン、説明的順次デザイン、探索的順次デザイン)と統合(連結、積み上げ、合体、埋め込み)の話題が紹介された。さらに、混合研究法を用いた研究成果の発信では、研究目的(質・量・混合)、データ収集(データ・ソース・テーブル)、研究手続き(ダイアグラム)、結果・考察(ジョイントディスプレイ)を含めるといったガイドラインが紹介された。



講演中の八田 太一氏

講演3では、廣瀬眞理子氏(関西学院大学大学院文学研究科)によって、「実践研究から見た質的研究主導型混合研究法の可能性」と題した講演が行われた。廣瀬氏は、実験心理学社会学、そして臨床心理学に携わった経験から、混合研究法の特徴として、(1)問題解決指向、(2)読者中心、(3)作法があること、という3点を挙げた。次に、Hesse-Biberや抱井による「質的研究主導型MMR」の定義を紹介した。さらに「質的研究主導型MMR」の事例として、自身が取り組んできた「青年期発達障害者家族のための行動支援プログラム」の開発実践を紹介した。そこでは、八田氏の発表を引き継ぐ形で、(1)MMRのデザインの選定、(2)手続きダイアグラム、(3)データテーブル、(4)ジョ

イントディスプレイといったガイドラインに従って実例が紹介された。最後に、混合研究法を用いる利点として、行動支援プログラムの開発といった、複雑で実践的な課題に関わる新しい洞察が得られ、またその洞察を第三者と共有しやすくなるのではないかと、という意見が述べられた。



廣瀬 眞理子氏の講演の様子

コロキウム第2部では、「オープン・ディスカッション」として、第一部の講演者3名に加え、稲葉光行氏(立命館大学)と安田裕子氏(同)が参加し、フロアから、抱井尚子氏(青山学院大学)や多数の参加者が関わる形で活発な議論が行われた。前半部では、質と量を組み合わせる手法など、多様なマルチメソッドの方法論の可能性、その背景にある方法論的パラダイム、さらに方法論的パラダイムを見据えた上でMMRを実践することの重要性などが議論された。後半部では、現在混合研究法を用いた論文を執筆中の参加者から、国内の大学での混合研究法に関する指導・審査体制不足の苦労といった話題が共有された。

コロキウムの「オープン・ディスカッション」では、様々なワークショップや研修プログラムが提供されている米国と比べ、日本ではまだ混合研究法を用いた研究事例に触れる機会も少なく、論文執筆のアドバイスを得る機会も少ないという課題が明らかになった。一方で、そのような現状にあるが故に、今回のコロキウムのように、混合研究法の導入的な講演から論文執筆での疑問点や課題を共有し、意見交換をする場を渴望する研究者の存在を強く感じた。そして、そのような場を提供する組織としての混合研究法学会に対する期待、あるいは学会が担うべき役割の大きさを実感する集会であった。

報告者：

稲葉光行
立命館大学政策科学部教授
日本混合研究法学会理事長

第2回混合研究法(MMR)コロキウム

立命館大学東京キャンパス 2019年2月16日

＜午前の部＞

開催趣旨: 成田慶一(京都大学医学研究科)

ミニ・レクチャー:「混合研究法概説」八田太一(京都大学iPS細胞研究所上廣倫理研究部門)

話題提供 3件

オープン・ディスカッション1

＜午後の部＞

講演:「手続きダイアグラムとジョイント・ディスプレイでみる混合型研究例-基本型から応用型デザインまで」田島千裕(学習院女子大学国際文化交流学部)

オープン・ディスカッション2

閉会: 稲葉光行(立命館大学政策科学部)

2019年2月16日、立命館大学東京キャンパスで開催された「第2回混合研究法コロキウム」に参加しました。私は長く海外で日本語を教えており、日本との接触機会が少ない地域で日本語を学んでいる学習者の、学習動機と学習継続に関わる要因を研究テーマにしています。地域の特性から研究協力者の数が多くないため、量的研究にするか質的研究にするか悩んでいたところ、大学院の先生から「混合研究法というものがある」と教えていただいたのがこの学会との出会いです。

今回は外国語教育がご専門の田島先生のご講演を目的に参加しました。テーマは「手続きダイアグラムとジョイントディスプレイからみる混合研究例」で、基本的デザインの「説明的順次デザイン」から「社会的公正デザイン」、応用的な「多段階評価デザイン」まで、主に田島先生のご研究を例に、混合研究法的設問の立て方・各デザインのプロセスにおける手続き・ジョイントディスプレイの示し方などを詳解くださり、自分の研究に置き換えれば何をどうすべきかを具体的にイメージすることができました。また、「デザインはシンプルにし

て研究課題で独創性を見せる」「統合結果と考察は分けて示し考察のメタ推論で研究者の実力を見せる」など、実際にそれぞれのデザインで研究に取り組まれている田島先生ならではのご提言も、なるほど、と思わされるものばかりでした。

講演以外にも、現在進行中の混合研究についてオープンディスカッションがありました。3人の話題提供者の方々は医療・看護系がご専門で、私の研究分野とは異なりますが、研究デザインにおける迷い、統合で苦労している点などは共通しています。会場の参加者からは、話題提供者の悩みを解決すべく、追加調査の提案やジョイントディスプレイの改善案などが出され、私にとっても学ぶところが多くありました。会終了後には、同じ質的分析法を用いている研究者と意見を交わし、研究への示唆を得ることができました。多分野の方から多様な意見をいただけるのがこの学会の魅力です。このような機会をいただき、心より感謝申し上げます。

報告者:

山口紀子
お茶の水女子大学大学院国際日本学領域専攻博士後期課程

質的研究のワークショップ: アジア地域の研究者に向けた質的研究の基礎がためと参加型実践演習

小さなお庭と猫の図書館 2019年4月13日-14日



John W. Creswell (ミシガン大学)

講師陣



Melissa Dejonckheere (ミシガン大学)



廣瀬真理子 (関西学院大学)

(トピック1. 質的研究の重要な特徴と研究デザイン)

ジョン先生から、質的研究の定義、質的研究と量的研究の違い、質的研究実施のステップについてお話いただきました。研究に取り組む中で、自分自身の関心あるテーマや明らかにしたいことを探求するために、質的、あるいは量的アプローチのどちらが適切なのかと迷う場面に出くわします。ジョン先生の講義では、質的研究を用いるのは「探求する必要がある時」、「問題が明確ではない時」、「測定することが困難な現象である時」、「参加者の声を聴く必要がある時」とのことで、自身の関心の探求に適した研究手法を考えるためのヒントをいただくことができました。

また、質的研究のゴールは「central phenomena (or concept): 中心となる現象・コンセプト概念」を理解することであり、アウトカムだけではなくその探索プロセスにも焦点を当てることが重要であると気づかされました。

①研究問題を同定する、②哲学的前提を決定する、③具体的な質的研究デザインを決定する、④クエスチョンと目的を述べる、⑤質的データを収集する、⑥質的データを分析する、⑦質的データの妥当性検証と解釈、⑧質的レポートを書くという質的研究のステップ一つ一つを丁寧にお話いただき、本ワークショップで質的研究を学び進めていく上での理解につながりました。

(トピック2. 質的研究の基礎となる哲学的前提)

“哲学的前提”という文言だけでは、当初ピンと来ていませんでした。ジョン先生から、「あなた自身の世界観、哲学を記述することが大事。哲学とは、子どもを育てるときに、どう育てたいか、どう育ってほしいかという親自身の信念があるでしょう。それと同じように、研究の信念がある。」と言われ、「はっ!」と気づかされました。質的研究で大事なことは、自分の思考に影響を及ぼしている世界観を自覚していることであり、自分は何を求めて、この研究をしているのかという“研究者としての立ち位置”を明示することの大切さをとてもわかりやすく、教えて下さいました。

(トピック3. 質的研究の質問/設問)

メリッサ先生より、具体例を提示しながら質的研究の質問/設問についてお話いただきました。私自身、研究のステップの中で関心あるテーマや明らかにしたいことをResearch Questionとして問いを立てていくのに、最も頭を悩ませ多くの時間を割いてきました。メリッサ先生は、研究の背景にある関心や目的を文章として記述し、Research Questionとして洗練させていくことの重要性を強調されていました。研究の問いを立てていく
(次頁につづく)

報告者:

野崎真奈美

順天堂大学医療看護学部教授
日本混合研究法学会副理事長

岡本美代子

順天堂大学医療看護学部准教授

川上和美

順天堂大学医療看護学部准教授

質的研究のワークショップ: アジア地域の研究者に向けた 質的研究の基礎がためと参加型実践演習

小さなお庭と猫の図書館 2019年4月13日-14日

(前頁からつづく)

段階では、他者から「なぜその研究のことを気にしなければならないのか？」と尋ねられた場合を考えながら、自分自身と研究の重要性について対話することが必要であると気づかされました。

さらに、研究目的やResearch Questionの基本形を示していただき、考え方や記述を整理するのによい示唆をいただくことができました。

(トピック4. 質的研究において収集されるデータ種別)

メリッサ先生から質的研究において収集されるデータ種別について説明されました。

質的研究ではデータソースとして、集団における個人、場所、会話、書類と記録、音声・動画資料を扱います。したがってデータ収集として、インタビュー、観察、および既存の文字／画像データの収集が行われます。インタビューを用いる際の研究目的として、探求すると記述することがありますが、まさに探っていく様子を意味しています。インタビューにはIndividual InterviewとFocus Groups Interviewがありますが、個人の経験と解釈が興味深い場合に、相対的な会話を通して深い探索をする場合はIndividual Interviewを用います。一方、データの深さよりも幅広さが重要な場合や意見の多様性や両極性をあぶりだしたい場合にFocus Group Interviewも用います。いずれの場合も、構造化インタビュー、半構造化インタビュー、非構造化インタビューを使いこなす必要があります。構造化インタビューはSpecified probes (探査項目)を設定し、決められた項目と順序で進めていくものです。一方、半構造化インタビューでは会話形式で順序と表現はインタビューする人の判断に任されるので難易度が高いといえます。

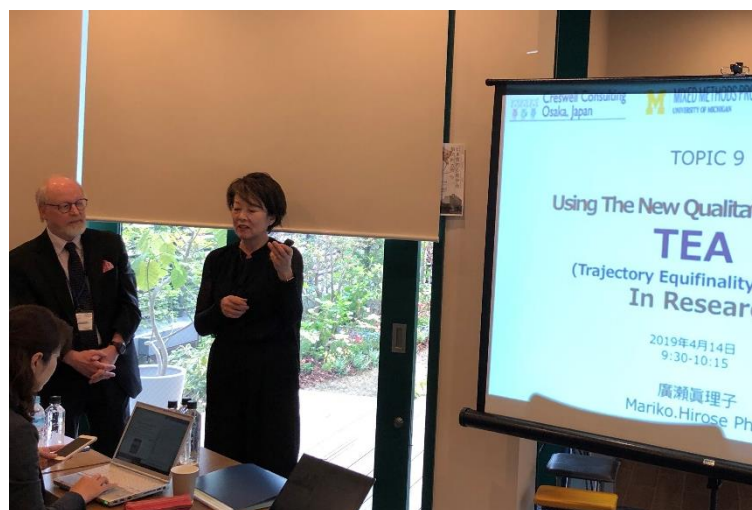
そこでインタビューする人がバイアスを避けることはできるのかという疑問が浮かびますが、①研究前に、多職

種でチームを組む、②研究後に、多職種でチームを組み、解釈を確認することで回避できるとの回答を得ました。

また、人は言うことと実際の行動が常に一致するとは限らないため、他の方法では補完されない場合に観察を用いると説明されました。特に場の状況を詳細に理解しようとする際に適しているといえます。観察にも構造化観察と非構造化観察がありますが、いずれも観察者のトレーニングが必要であると追加されました。

どんな研究でもバイアスはあります。量的研究では、バイアスを取り除くために統計処理をかけますが、質的研究では、正直で実直に前向きにバイアスを活用すべきです。これらのデータ収集を厳密に行うために、常に目的とリサーチクエスチョンを意識して臨むことが必要であり、パイロットスタディの実施、複数のデータソースによって補完していくことが望ましいとの示唆を得ました。

(次頁につづく)



報告者:

野崎真奈美

順天堂大学医療看護学部教授
日本混合研究法学会副理事長

岡本美代子

順天堂大学医療看護学部准教授

川上和美

順天堂大学医療看護学部准教授

質的研究のワークショップ: アジア地域の研究者に向けた 質的研究の基礎がためと参加型実践演習

小さなお庭と猫の図書館 2019年4月13日-14日

(前頁からつづく)

(トピック5. 質的インタビューの実施)

メリッサ先生から、質的研究における調査の特徴として、対象者の考えや経験を探っていくというスタンスについての講義をして頂きました。そのコツとして、“Sub question”(周辺の質問)から始め、“Central question”(核心となる質問)を一番、最後に準備しておくことや、“General Follow-up questions”として、例えば、「もう少しそれについて話してください。」「何か具体例は挙げられますか?」等の質問例をいくつか準備しておくことよとのことでした。そして、いくつかインタビューが終了した後に、その情報を効果的に聞き出せるような方法をインタビューア同士で振り返りをして、ストラテジーを考え、チーム内で共有しておくことよとのことでした。中には、“イケてないテクニック”も教えて下さり、初学者にとっては、転ばぬ先の杖となりました。



(トピック6. 質的データの分析とコーディング)

ジョン先生から、質的データの分析とコーディングについて説明されました。データを質的に分析する基本的なステップとして、①データを探索する、②データをコーディングする、③主題・カテゴリーに発展させる、④主題・カテゴリーの意味を解釈する、⑤解釈を結果に記述する、を踏みます。特にコーディングの過程として、重要なのは“Lean coding(贅肉がとれたコーディング by John)”です。Lean codingとはコーディングを狭くとることです。扱うのに程よい数のコード数30-40くらいにまず絞ることです。そこから、さらに20くらいに減らし、最終的には5-7の主題に落とし込むことが望ましく、まさに“winnow(取捨選択する)”の過程といえます。目安となる数が明確に示されたことで理解が深まりました。

最後に、これらの質的データ分析の過程を支援するソフトウェアとして、Atlas.ti, Ethnograph, Hyper RESEARCH, MAXQDA, Nvivo, Dedooseが紹介されました。手作業と異なり、データの保管、コードを置く、マップ作成、コードによる個別の情報の横断、覚書作成などが瞬時に可能であることが有用性といえます。日本では、Nvivoが普及しているようですが、MAXQDAにはMMRの機能があり、日本語版もあるとのことでした。研究者を支援するものとしてソフトウェアを身近に感じ、是非挑戦してみたいと感じました。

(トピック7. 質的研究デザインのアプローチ)

ジョン先生から、質的研究デザインのタイプ、質的研究デザインの例、質的研究デザインを選択する、というトピックについてお話いただきました。質的研究デザインには、ナラティブ、現象学、エスノグラフィー、グラウンデッド・セオリー、ケース・スタディ、といったものがあり、自身のResearch Questionと (次頁につづく)

報告者:

野崎真奈美

順天堂大学医療看護学部教授
日本混合研究法学会副理事長

岡本美代子

順天堂大学医療看護学部准教授

川上和美

順天堂大学医療看護学部准教授

質的研究のワークショップ: アジア地域の研究者に向けた 質的研究の基礎がためと参加型実践演習

小さなお庭と猫の図書館 2019年4月13日-14日

(前頁からつづく)

研究目的に基づいてどのデザインを選択するとよいのか迷うことが多いのですが、ジョン先生の講義では、研究目的から適切なデザインを選択できるようフローで示していただきました。例えば、個人の経験を記述し、経験を集約するのであれば現象学が適しているということになります。各研究デザインの焦点、データ収集、データ分析、研究産物の特徴を考慮するなど、研究デザインを選択する際の考え方を学ぶことができました。

それぞれの研究デザインを学び習熟していくためには、優れた論文を読み、さらに実践していくことが重要であることを学びました。

(トピック8. 参加型アクションリサーチの基礎)

メリッサ先生からアラスカのたとえ話「研究者は蚊みたいなもの」を紹介してもらった時、すごく上手い比喻だと思いました(笑)。対象者へのフィードバックのない研究からの反省から、生まれた参加型アクションリサーチ(PAR)では、対象者自身が当事者としての専門家であって、その場に参加しているのが研究者であるというスタンスをとるのが特徴で、特定の手法やデザインはないとのことでした。このデザインの行方は壮大で、自分の研究テーマがどうやってコミュニティと研究者双方に社会的な影響を与えうるのかという命題のもと活動が長期に及ぶこともあるとのことでした。

(トピック9. 複線経路等至性アプローチの研究への活用)

TEAの基本概念や手法について、マリコ先生の研究実践例をお示しいただきながらわかりやすくお話いただきました。TEAという言葉の本ワークショップで初めて聞き、難しそうに感じられたのですが、人間の行動、特に何らかの選択とその後の状態の安定や変化に関

心を寄せ、明らかにしていくためのアプローチであり、ヘルスケア領域においても身近なテーマに適用できるのではないかと考えました。

TEMでは時間が持続する中で、対象の等至点(多様な経験の径路がいったん収束する地点)、分岐点(ある選択によって各々の行動が多様に分かれていく地点)を明らかにしながら、等至点へ向かう社会的助勢(促進する力)、社会的方向付け(阻害する力)についても検討し、その経路を可視化できるようTEM図として示すことを学び、今後取り組んでみたいと感じました。

(トピック10. 質的研究における妥当性の検討)

ジョン先生から、質的研究では、“Validity”という言葉の代わりに、ここ最近の議論より使われているのは、“Integrity”や“FidelityとUtility“(2018年にAPA基準)という言葉とのことでした。これらは、領域によって、いくつか日本語訳があるそうです。これらを満たすための5つの戦略(メンバー同士の確認、トライアングレーション、反証となるエビデンス、外部レビュー)について、概要説明をして頂きました。

(次頁につづく)



報告者:

野崎真奈美

順天堂大学医療看護学部教授
日本混合研究法学会副理事長

岡本美代子

順天堂大学医療看護学部准教授

川上和美

順天堂大学医療看護学部准教授

質的研究のワークショップ: アジア地域の研究者に向けた 質的研究の基礎がためと参加型実践演習

小さなお庭と猫の図書館 2019年4月13日-14日

(前頁からつづく)

さらに、Reflexivity(再帰性)の重要性についても触れ、研究者自身が持ち込む世界観が解釈にどのように影響したのかといったバイアスに再帰的であること、トピック2でも述べられたように、国際的な質的研究において、自身の研究者としての立ち位置について“方法”のセクションで明示することがとても重要だということ改めて説明をして下さいました。

(Topic 11. 混合研究法に質的研究を用いる)

ジョン先生から、混合研究に質的研究を用いることについて、説明されました。

混合研究法の本質的特徴は、量的分析、質的分析どちらか1つだけを行うよりもさらにデータを深掘りできることです。単に量的データと質的データを集める以上の成果を得るために、新たにインサイト(洞察)をもたらすことが必要であると強調されました。ご存知の通り、混合研究はデータ収集の時期の違いから3つの基本的デザイン(収斂的デザイン、説明的順次デザイン、探索的順次デザイン)に分けられますが、タイプ毎にインサイトのもたらし方が異なります。収斂的デザインでは、2つのデータベースを比較すること、説明的順次デザインでは、量的結果をより深く理解すること、探索的順次デザインでは、より洗練された量的データをもたらすことによって得られます。統合Integrationには2つのタイプがあり、パウンドケーキを作るイメージを用いて説明されました。(マージー合体)してなくなる(小麦粉と卵が溶き合わされる)場合(合体)と(接続、結合ーコネクティング)単に混ざっている(レーズンが残っていく)場合です。すなわち、基本型デザインとそれらを埋め込んだ複合的デザイン(介入トライアル、複数事例研究、プログラム評価、CBPR参加型研究)が生まれるわけですが、どこで統合するのかは研究者自身がよく考

えるべきであると説明されました。常に研究目的から一貫した活動であるかを自問自答する必要性と、研究者に与えられた裁量について再認識しました。

まとめ

今回のセミナーには、教育学、心理学、社会福祉学、看護学など各分野の研究者が参加されていましたが、分野によって研究に関するKey wordsの使い方が違うことを再認識しました。私達は看護学で常識とされる価値観にがんじがらめになり、知らず知らずのうちに可能性を狭めていたことに気づきました。今回セミナーに参加したことで、無意識に持っていた枠を取り払い、各自の研究を発展させていけるような勇気をいただきました。立ち止まって、ブラッシュアップするために、次回のセミナーにも参加したいと思います。



報告者:

野崎真奈美

順天堂大学医療看護学部教授
日本混合研究法学会副理事長

岡本美代子

順天堂大学医療看護学部准教授

川上和美

順天堂大学医療看護学部准教授

大会演題募集

2020 日本混合研究法学会第6回年次大会(2020年10月24-25日)の演題募集を間もなく開始致します。詳細は下記JSMMRサイトをご覧ください。

<http://www.jsmmr.org/conference>

編集後記

ニュースレター第8号は、MMIRAアジア地域会議/日本混合研究法学会第5回年次大会(2019年9月14-16日) in 浜松の参加報告を中心に、会員・理事から記事を募りました。大会を改めて振り返る機会になりました。その他MMRコロキウムやワークショップ参加報告記事をお寄せ頂きました。ご寄稿くださった方々にこの場を借りて改めてお礼を申し上げますとともに、第8号発行が遅れましたこととお詫び申し上げます。

次号のニュースレター第9号は、2020年秋を予定しております。ご寄稿頂ける会員の方は、是非事務局メールアドレスまでご連絡くださいますようお願い申し上げます。記事は随時受け付けております。ご協力のほど、何卒宜しくお願い致します。

2020年は新型コロナウイルスの影響で研究および教育活動にさまざまな影響が出ておりますが会員の皆様のご健康が守られますよう心よりお祈り申し上げます。

ニュースレター記事宛先(事務局):
jsmmr.adm@gmail.com

日本混合研究法学会

ニュースレター第8号

【発行日】2020年5月1日

【発行者】日本混合研究法学会

【理事長】稲葉光行

【副理事長】野崎真奈美

【理事】

稲葉光行・立命館大学
井上真智子・浜松医科大学
大河原知嘉子・東京医科歯科大学
抱井尚子・青山学院大学
河村洋子・産業医科大学
香曾我部琢・宮城教育大学
田島千裕・学習院女子大学
成田慶一・京都大学
野崎真奈美・順天堂大学
八田太一・京都大学
福田美和子・東京慈恵会医科大学

【事務局】

福田美和子・東京慈恵会医科大学

【ニュースレター編集委員長】

田島千裕・学習院女子大学